

観峰館 令和三年度 春季企画展

対聯飾り—おもてなしの言葉—

会 期…令和三年四月十日（土）～五月三十日（日）
会 場…観峰館 新館 特別展示室

ごあいさつ

「対聯」とは、二幅の掛軸に対となる語句を書いた形式をいいます。中国では、長寿や結婚、新築などのお祝い事に贈られることも多く、室内の調度品として飾られます。

本展では、対聯の左右間に絵画の掛軸を掛け、三幅対形式で展示してみました。この「対聯飾り」で、文字の書きぶりを楽しみ、書かれた言葉を読み、絵画を観ていただくことで、書と絵画を一層深く味わっていただくことができます。

対聯を認める紙には、鮮やかな色や紋様を施した蠟箋を使った作品があります。見た目にも華やかな紙や絹は、書を贈る相手へ心を込めた「おもてなし」の気持ちが込められています。本展に並ぶ作品を通して、そのような想いを感じ取っていただけたなら幸いです。

「対聯飾り」について

「対聯飾り」とは、本展オリジナルの名称で、書と絵画を
楽しむための展示方法のことです。

日本では仏教の三尊像を掛軸で祀る三幅対があります。ま
た、鎌倉・室町時代には、南宋の仏教美術と武家文化が融合
し、書院飾りや茶の湯の飾りとして書と絵画の取り合わせを
楽しむ鑑賞法が試みられています。

中国では日本のような床の間はありませんが、白い漆喰壁
の居間や応接間は、上下左右の制限が少ない装飾空間です。
ここに、季節（節気）に合わせて、来客をもてなす書と絵画
の組み合わせを考えることは、コレクターの楽しみの一つで
あったでしょう。

別々に制作された書と絵画を三幅対にしつらえて、新しく
生まれるもてなしの心をお楽しみください。

1 包世臣「行書八言対聯」清時代中〜後期



【釈文】

金玉其心芝蘭其室 仁義為友道德為師 安吳包世臣

【作家情報】

包世臣（一七七五〜一八五五）
字は慎伯。号は倦遊閣外史、倦翁など。安徽涇県の人。嘉慶一三年
（一八〇八）の挙人。書法の研究にすぐれ、逆入平出・峻落反収の技
法を案出し、書は気力の充満が肝要であることをといた。

【解説】

本作は、金銀泥で文様が書き入れられた橙色の蠟箋に、太く黒々
とした墨線が映える。「黄金を心とし蘭のような高潔さを宝とする。
仁義を友とし道德を師とする」という語句は、人間の理想的な生き
方を示したものだろう。

2 左右：吳榮光「行書九言對聯」（左右）清時代後期 道光二年（一八四二）

中央：王 鏞「高士圖」（中央）清時代末期～中華民國初期頃



【釈文】

書：瓊玉六寸其明可自照 龍門百尺極高而無枝 辛丑吳榮光
画：松風澗水天然調抱得琴來不要彈 応勤先生雅属即正鼎臣王鏞

【作家情報】

吳榮光（一七七五～一八五五）

字は伯榮。号は荷屋。広東南海の人。嘉慶四年（一七九九）の進士。書画に長じ、多くの金石を蔵し、鑑識に精しかった。著に『筠清館金石文字』などがある。

王 鏞（生卒年不詳）

字は蘊成。号は雪浦。浙江湖州の人。金石を嗜み、詩・画を能くした。篆隸に巧みであったと伝えられる。

【解説】

左右の対聯には、「皇帝の持つ玉は自ら光りを発する。枝のない桐の巨木は極めて高い」という意味の語句が記されている。ここでの「玉」と「桐の巨木」はいずれも「かけがえのないもの」を示している。文字は本紙に対して小さく控えめではあるが、墨線にはニジミとカスレが多く表れており、躍動感に溢れている。

中央の絵画は、傍らに琴を置く高士を描く。高士とは俗世を離れ高潔に生きる人物のこと。山中で琴を楽しむ高士のひとは、俗人が憧れるものであったのだろう。

3 左右：趙時桐「篆書集焦氏易林句八言對聯」中華民國三年（一九四三）

中央：陳崇光「做蘇漢臣歲朝圖」清時代後期 光緒四年（一八七八）



【釈文】

書：家人其門蒙恩被徳 神為之輔受福宜年

癸未歲朝子正立春書 集焦氏易林句 叔孺趙時桐

画：戊寅冬日做蘇漢臣筆為 耕巖大兄烟台 一咲 若木弟陳崇光

【作家情報】

趙時桐（一八七四～一九四五）

原名は潤祥、のち時桐に改めた。字は叔孺、また獻忱。浙江省寧波の人。辛亥革命が起きると官を辞し、民国元年（一九一二）以後は上海に寓居して書画篆刻を売って生計を立てた。四十六歳のころから名が高くなり、師事する弟子が増えて、七十歳のときには門弟六十余人であったと伝える。

陳崇光（一八三九～一八九六）

名は炤。号は若木、晩年は櫟生と号した。江蘇省揚州の人。はじめは飾り模様の彫刻職人であった。花鳥、人物、山水を善くした。晩年、妻が発病したのに続いて自分も発狂し、乞食同様の身なりで奇人と目されたが、画は筆に任せていっそう超逸の気味になったという。

【解説】

細長い紙を用いた対聯には、「家が恩徳を蒙る。神が富を与える」という意味の語句が篆書体で書かれている。肥瘦のない線と均衡のとれた形には、人間の手で書かれたとは思えないほどの安定感があり、真紅の紙の上に堂々とした姿を見せている。

中央の絵画には、旗や太鼓、人形を持ち遊ぶ五人の子供が描かれる。旗には出世を意味する「禄神」が描かれ、人形は長寿を意味する「寿老人」である。元氣よく遊ぶ子供たちは、家が栄え、子孫繁栄が実現した結果を表している。

4 左右…何維樸「行書七言對聯」 中華民國元年（一九一二）

中央…趙起「歲寒三友圖」 中華民國三二年（一九四三）

開徑喜來三益友

壬子春日



升高還得九能才

詩孫何維樸

【釈文】

書…開徑喜來三益友 升高還得九能才 壬子春日 詩孫何維樸
画…吾聞松竹梅歲寒訂三友二子窃其名居然堪左右

癸未冬日擬十三筆草堂筆 趙雲壑時年正七十

【作家情報】

何維樸（一八四四～一九二五）

字は詩孫。号は盤止など。湖南道県の人。何紹基（一七九九～一八七三）の孫。書画篆刻をよくし、書は祖父に仿って一家を成した。

趙起（一八七四～一九五五）

字は子雲、号は雲壑など。江蘇呉県の人。三十歳の時、呉昌碩（一八四四～一九二七）に入門して書、篆刻、絵画を学んだ。

【解説】

左右の對聯には「道を開くと三種類の友が来る。高く升とまた九つの才能を得る」と書かれる。起筆で筆を突き入れるような筆法と、肥瘦を巧みに使い分けた柔らかな線と躍動感ある字形は、作者の祖父であり清朝書法史の大家である何紹基の書法を継承するものである。

松・竹・梅が描かれた中央の絵画は「歲寒三友図」と呼ばれる。極寒の季節にあっても力強く成長する松・竹・梅は、「高潔さを失わない」という文人の理想を象徴している。

5 左右…陸潤庠「行書八言對聯」清時代末期～中華民國初期頃

中央…胡遠「蘭竹圖」清時代後期



【釈文】

書…竹氣初流山靜若古 蘭言相悟春永於年

静泉仁兄大人雅正 鳳石陸潤庠

画…參差不可吹紉佩寄遠道遂令如石心歲晚永相好翠袂倚岩嶠來尋

碧玉簫弘衣成歷却遺跡映寒潮 胡公寿題于寄鶴軒

【作家情報】

陸潤庠（一八四一～一九二五）

字は鳳石。元和（蘇州）の人。辛亥革命後は官を辞して故郷に帰り、国民党政府に係わろうとはしなかった。その書は温雅朗潤の風をそなえ欧陽詢（五五七～六四一）・虞世南（五五八～六三八）に近いと評される。

胡遠（一八二三～一八八六）

字の公寿で知られる。号は瘦鷄・横雲山民などと称した。江蘇華亭の人。太平天国の動乱を避けて、咸豊二年（一八六一）に上海へ移住した。画は山水・蘭竹・花卉を得意とし、古今の書家の妙を集めて評判を得た。

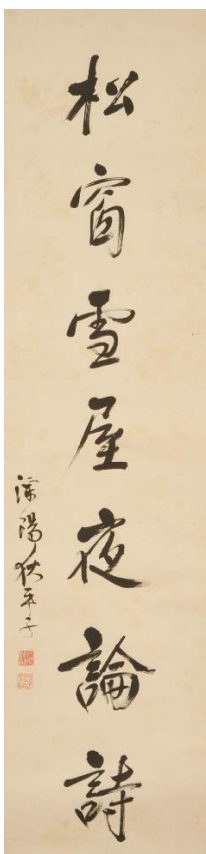
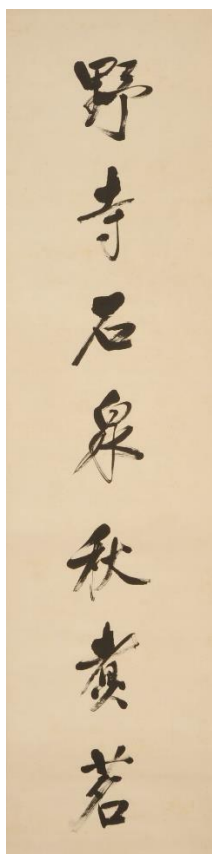
【解説】

青い紙に書かれた左右の對聯には「竹の氣が流れ山は太古のようである。蘭は語り合い春が永遠に続くようである」という意味の語句が書かれている。自然な肥瘦を伴った墨線で書かれた安定感ある字形は、東アジア全域で広く通行している正統派の書風であると言える。

中央の絵画には蘭と竹が描かれている。蘭は豊かな香りと優雅な姿を持ち「花中の君子」と称される。また竹は力強くまっすぐ伸びる様子が文人の理想とする純朴さに重ねられる。いずれも伝統的な画題である。

6 左右：狄平子「行書七言對聯」 中華民國二〇年（一九三一）以後

中央：屈兆麟「松壽圖」 清時代末期～中華民國初期頃



【釈文】

書：野寺石泉秋煮茗 松窗雪屋夜論詩 溧陽狄平子
画：松寿 仁甫屈兆麟

【作家情報】

狄平子（一八七二～一九四〇）

字を楚青といい、平子は号。康有為らの変法運動を支持したが、戊戌政変で日本へ亡命した。また書・画・碑帖の優品を影印して出版して書画学習者に貢献し、自身も書画の鑑別をよくした。

屈兆麟（一八六六？～？）

字を仁甫といい、北京の人。清朝宮廷の如意館で宮廷画家として仕え、慈禧皇后の代筆を務めた。

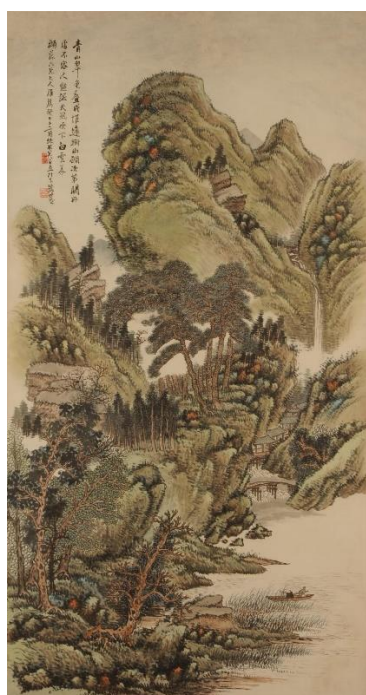
【解説】

左右の対聯には「野中の寺では秋に湧き水で茶を煮る。雪の夜に松の見える窓辺で詩を論じる」という意味の語句が書かれる。細く、時にカスレを伴う墨線と、やや右に傾く字形が相まって、各文字には躍動感が溢れている。

中央の絵画には、巨大な松の大木に群がる鶴が描かれている。天より飛来した鶴たちは、松の根元で羽を休めているようである。優雅に落ち着いた様子が「瞑想」を連想させることから、鶴は智慧の象徴ともされる。

7 左右：翁同龢「楷書八言對聯」清時代後期

中央：吳 滔「青山翠色圖」清時代後期 光緒十九年（一八九三）



画：青山翠色疊成堆遠樹幽澗次第開好処不容人点缀天風吹下白雲

来 顧藤六兄大人雅属 癸巳十二月疎林吳滔画於来鷺草堂

【作家情報】

翁同龢（一八三〇～一九〇四）

字は叔平、また声甫。松禪・瓶生と号した。江蘇常熟の人。光緒帝の師傅として政界に重きをなしたが、戊戌の政変後、引退して故郷に帰った。博く学芸に通じ、同治・光緒年間の書家第一とされる。

吳滔（一八四〇～一八九五）

字を伯滔といい、鉄夫、疎林などと号した。浙江省石門の人。山水は奚岡（一七四六～一八〇三）を学んだ。画名高く、終年門を閉ざして作画につとめ、四方より画を乞う者が戸外に満ちたといわれる。

【解説】

左右の對聯には「太華山の積雪は優れた風景である。広陵の大波は優れた景色である」という意味の語句が太い墨線で力強く書かれている。橙色の蠟箋には、鳳凰と龍が描かれている。いずれも吉祥を示す想像上の生物である。

中央の絵画には、青々とした山が描かれている。本紙下部に描かれた舟と人物から、山の大きさを想像することが出来る。作品そのものの大きさも相まって、對聯に書かれた迫力ある文字の姿と釣り合うような、雄大な山水画である。

【积文】

書：太華奇觀萬古積雪 広陵妙境八月驚濤

古宜二兄属 翁同龢

8 左右：吳大澂「篆書八言對聯」清時代後期

中央：王震「百祿延年圖」中華民國五年（一九一六）



【釈文】

書：甘醴自生嘉禾自獻 騶虞來集鳳皇來儀 憲齋吳大澂
画：百祿延年 丙辰仲夏白龍山人王震寫於海上

【作家情報】

吳大澂（一八三五～一九〇二）

字は清卿、憲齋と号した。江蘇吳県（蘇州）の人。鐘鼎金石の学に深く、清末を代表する大官金石学者。文字学の名著として『説文古籀補』を撰した。書は篆籀を得意とした。

王震（二八六七～一九三八）

字は一亭、白龍山人と号した。浙興吳興の人。清末民初の実業家で、吳昌碩（一八四四～一九二七）に師事して晝画に巧みであった。

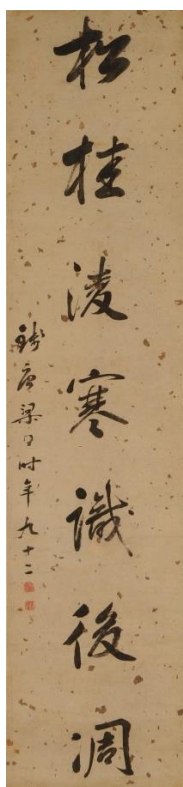
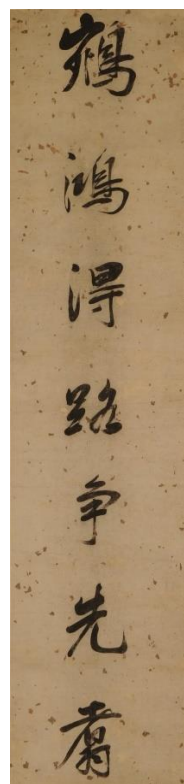
【解説】

左右の対聯には「甘い水が湧き出て豊かに実った穀物を捧げる。騶虞（伝説の動物）が集まり鳳凰がやって来る」という意味の語句が篆書体で書かれている。古様で素朴な字形を用いて、蠟箋の紋様にとらわれずに文字を配置した本作には、華美にはならない堂々とした趣がある。

中央の絵画には、紙面中央に長寿の象徴である鹿が描かれている。また鹿は、その発音が「祿」と通じることから富の象徴ともされる。鹿のつぶらな瞳には、左右の対聯と通じするような素朴さがある。

9 左右：梁同書「行書七言對聯」清時代中期 嘉慶一九年（二八一四）

中央：王 礼「鶴松図」清時代後期 同治一二年（二八七三）



【作家情報】

梁同書（一七二三～一八一五）

字は元穎。号は山舟など。钱塘（浙江杭州）の人。乾隆一七年（一七五二）特に進士を賜わる。書は顔真卿（七〇九～七八五）、柳公権（七七八～八六五）より入り、のち米芾（一〇五一～一一〇七）を法とした。

王礼（二八一三？～一八七九？）

字は秋言。号は秋道人、蝸寄生、別に白蕉研主とも署した。江蘇省呉県の出身で、上海で長く暮らした。はじめ画名を知られなかったが、張熊（二八〇三～一八八六）がその画を見て、人に称賛してから名を知られるようになった。

【解説】

左右の対聯には「鶴や鴻は路を得て先に飛び立とうと争う。松と桂は寒さを凌いだ後にしおれることを知る」という意味の語句が書かれている。各文字は細身の墨線で、やや小ぶりである。時折見せる太い墨線やカスレが紙面に変化を与えており、長く見ても飽きの来ない作品となっている。

中央の絵画は、岩の上に片足で立つ鶴を描いたもの。背景には松と梅があり、冬の澄んだ空気を感じさせる。首を持ち上げる鶴は、これから大空へと飛び立つのかもしれない。

【釈文】

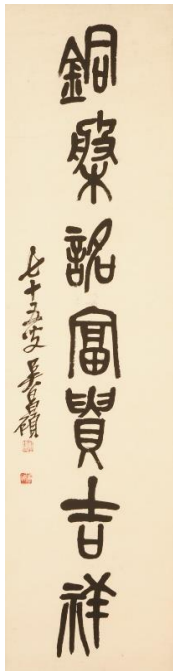
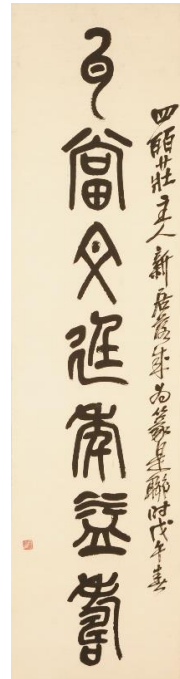
書：鶴鴻得路爭先翥 松桂凌寒識後凋 錢塘梁同書年九十二

画：三亭南畔第三株 止庭尊兄大人有道之属 癸酉小春月

吳江王礼写於白蕉研齋

10 左右：吳昌碩「篆書吉祥句七言對聯」中華民國七年（一九一八）

中央：俞原「山水人物圖」中華民國一三年（一九二四）



【釈文】

書：瓦当文延年益寿 銅盤銘富貴吉祥

四節莊主人新居落成爲篆是聯時戊午春 七十五叟吳昌碩

画：画友女牀山民作此及爲己仙去矣哀哉今偶閱目其筆意頗類石師

予加以焦墨竹樹轉得鄭虔遺趣并爲記之 甲子冬趙雲壑

【作家情報】

吳昌碩（一八四四～一九二七）

名は俊卿、字は倉石。缶廬・苦鉄などと号した。晩年は字の昌碩が通行した。浙江安吉の人。光緒三十年（一九〇四）、同志とともに西泠印社をおこし、詩書画篆刻の全てに大きな足跡を残した。

俞原（二八七四～一九二二）

字は語霜など。号は女牀山民。浙江省帰安（今湖州）の人。上海に流寓して売画生活を送った。辛亥革命後は人との交際を絶って作画に専心した。

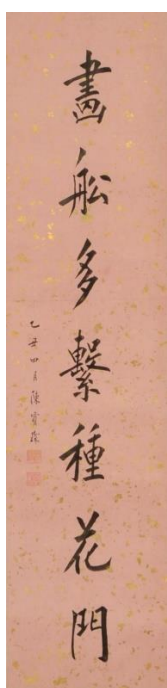
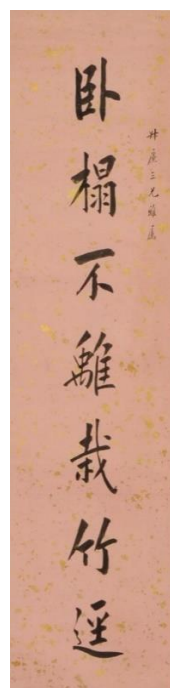
【解説】

左右の対聯には「瓦当文のように寿命を延ばし健やかに過ごす。銅盤銘のように財を持ち良いことに恵まれる」という意味の語句が書かれている。墨をたっぷり含んだ重量感のある線を用い、時折カスレを見せることによって、紙面には心地よい力強さが漂っている。

中央の絵画には、樹下で佇む男性が描かれている。自然に囲まれた質素な環境は、文人が理想とするものだろう。カスレと淡墨を併用することによって、紙面からは独特な軽妙さが感じられる。

11 左右：陳宝琛「楷書七言對聯」中華民國十四年（一九二五）

中央：鄧春澍「山居幽賞圖」中華民國三十三年（一九四二）



【釈文】
書：臥榻不離栽竹徑 画船多繫種花門

叔廉三兄雅属 乙丑四月陳宝琛

画：山居幽賞入秋多処々舟楓映翠螺欲写江南好風景雪川一派維摩

壬午長夏作於雲逸狼廬 尔昌先生大雅正之 青城鄧春澍

【作家情報】

陳宝琛（一八四八～一九三五）

字は伯潜、伯泉。号は弼庵と称した。福建閩州の人。同治七年（一八六八）の進士。官は太保に至り、宣統帝溥儀の太傅（補佐官）を務めた。書を善くし黄庭堅（一〇四五～一一〇五）に似たと評される。

鄧春澍（一八八四～一九五四）

青城と号した。江蘇武進の人。詩書画家刻に巧みであった。特に石を描くことに巧みで、石聖と称された。著に『青城画萃』などがある。

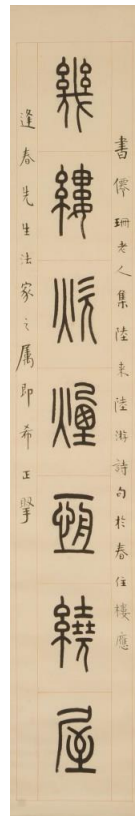
【解説】

左右の對聯には「寢床は竹を植えた徑を離れない。裝飾を施した船は花で飾った門を備え繁っている」という意味の語句が書かれている。金砂子を散らした桃色の蠟箋が用いられている。文字の線は直線的に引かれており、謹厳さを感じさせる。

中央の絵画には巨大な山と、その近くを流れる川を描く。川には一艘の小舟が浮かび、一人の人物を乗せている。まっすぐに伸びる松の木と屹立する山々は、自然の雄大さを示しており、ある種の畏怖さえ感じさせる。

12 左右：王禔「篆書集陸來陸游詩句對聯」中華民國三年（一九四三）

中央：胡遠「梅花圖」清時代後期 光緒元年（一八七五）



【釈文】

書：幾縷炊煙恆繞屋 一枝梅景正橫窗 書僊冊老人集陸來陸游詩句於春住樓底 逢春先生法家之屬即希正 癸未季秋之月 福厂王禔

画（落款1）

春生南陌漸香吹盡撫了晴色尋遍西湖一碧濛濛惆悵芳魂難覓
 難覓畫屏不許東風近也一例隨他狼藉只夜來聞總聞午牘有翠
 禽濕咽 松煙煙肥月夜尊前正送陸吟賞遠夕此日相思於多悲誰
 夢冷野梅荒驛江城已是驚遲暮况次第催殘玉簫想素娥解佩
 冰華莫向蒼苔時消息

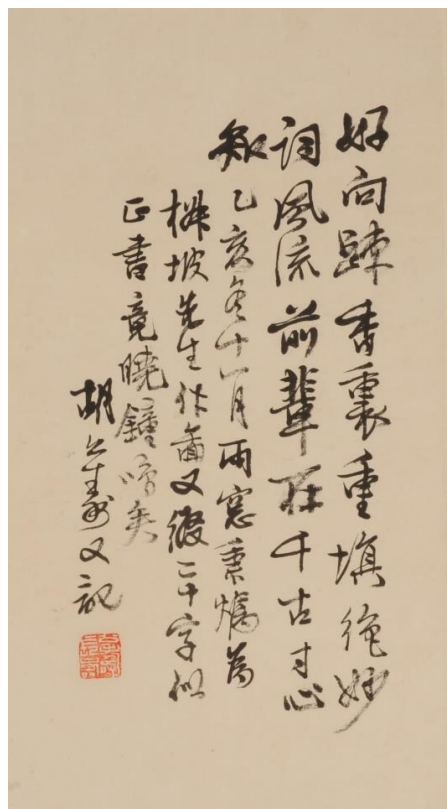
春生南陌漸香吹盡撫了晴色尋遍西湖一碧濛濛惆悵芳魂難覓
 画屏不許東風近也 一例隨他狼藉只夜來聞 闌干牘有翠禽淒咽
 猶憶煙肥月夜尊前正送遠吟賞遙夕此日相思欲寄憑誰夢冷野橋
 荒駢江城已是驚遲暮况次第催殘玉簫想素娥解佩冰華莫問何時
 消息

画（落款2）

椒坡先生仁四兄仿白石道人暗香疎影遺意製落梅詞一闋風流自
 賞逸趣橫生洵是藝林佳 爰作落梅圖持贈即以 大箸題之 華亭
 胡公壽識於春申浦畔

椒坡先生仁四兄仿白石道人暗香疎影遺意製落梅詞一闋風流自
 賞逸趣橫生洵是藝林佳 爰作落梅圖持贈即以 大箸題之 華亭
 胡公壽識於春申浦畔

画（落款3）



好向疎香裏重填後妙詞風流前輩存千古寸心 乙亥冬十一月雨窓秉燭為椒坡先生作又綴二十字似正書竟曉鐘鳴矣 胡公寿又記

【作家情報】

王禔（二八八〇～一九六〇）

初名は寿祺。字は維季。号は福厂（庵）。浙江杭州の人。光緒三〇年（一九〇四）西泠印社の創設に際して、大いに尽力した。解放後、上海中国画院の画師となる。書は楷隸篆書にたくみで、篆刻をよくした。また蓄印を喜び、自ら印傭と称した。『福厂蔵印』『麋硯齋印存』などを編集した。

胡遠（二八八四～一九五四）

字の公寿で知られる。号は瘦鷄・横雲山民などと称した。江蘇華亭の人。太平天国の動乱を避けて、咸豊二年（一八六一）に上海へ移住した。画は山水・蘭竹・花卉を得意とし、古今の書家の妙を集めて評判を得た。

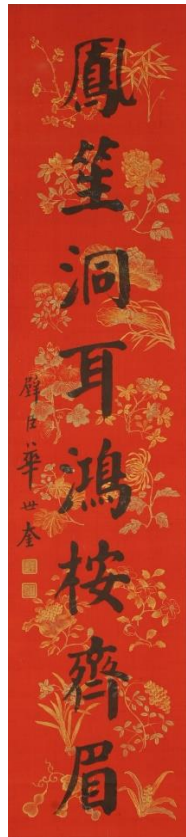
【解説】

左右の対聯には「周囲の家から出る炊飯の煙が糸のようである。梅の枝が窓を横切っている」という意味の語句が書かれている。紙面には、肥瘦のない線で書かれた均整のとれた文字が並ぶ。丸みのある線・短い線を所々に用いることで、ある種の可愛らしさを感じさせる書である。

中央の絵画には、大ぶりの梅の木が描かれている。梅は寒い冬の時期に花を咲かせる強靱さから「忍耐力」や「生命力」を象徴する。本作は梅の花が散る瞬間を描いており、一種の儂さを感じさせる。

13 左右：華世奎「楷書八言對聯」 中華民國二十二年（一九三二）

中央：蓮 溪「榴開見子図」清時代後期 光緒一〇年（一八八四）



【釈文】

書：鸞鏡同心雀屏中目 鳳笙洞耳鴻案齊眉 璧臣華世奎

画：榴開見子 甲申夏至後五日 野航蓮溪写意

【作家情報】

華世奎（一八六三～一九四一）

字は啓臣、号は璧臣、天津の人。幼くして書の研鑽を積み、天津隨一の書家と称されるようになる。高官を歴任し、民国成立後も清の遺民として終生弁髪を切らなかつたという逸話もある。顔真卿（七〇九～七八五）を学んだという書は氣迫に溢れて力強い。

蓮溪（二八一六～一八八四）

僧。字は蓮溪、号は野航。別に黄山樵子とも号した。江蘇興化の人。画は花卉・山水等を善くし、篆刻にも工であった。揚州周辺に居寓した文人たちと盛んに交流した。中年に黄山に学び、宋元の名跡を数多く鑑賞した。「黄山樵子」の別号はこれに因む。画によって生計を為し、老年に至つては率意の蘭竹を以つて世人の画を請うに応じたという

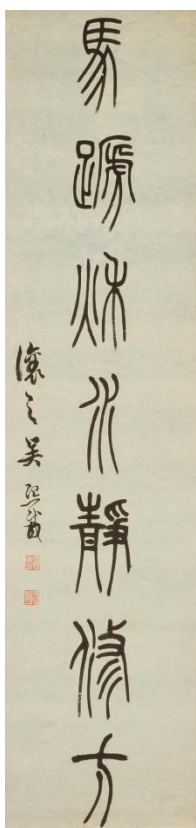
【解説】

真つ赤な絹が使用された對聯である。絹にはざくろや竹など、吉祥を表すモチーフが多数描かれている。「鏡のように心を同じくする良い婿を得る。同じ音を聞くように仲睦まじい」という意味の語句が書かれた本作は、結婚を祝うために用いられたと考えられる。

中央の絵画には、巨大なざくろと戯れる子供たちを描く。ざくろは多くの種をつけることから「多子」の象徴とされた。現実にはありえない幻想的な光景には、子孫繁栄の願いが込められている。

14 左右：呉讓之「篆書七言對聯」清時代後期

中央：戴 熙「山水圖」清時代後期 咸豐四年（一八五四）



【釈文】
書：虎尾春水安樂法 馬蹄秋水靜修方 讓之呉熙載

画：九叠屏風峭壁開壁間泉落自回々幽坡邃壑憑誰賞惟有松風過

嶺來 甲寅暮春醇士戴熙

【作家情報】

呉讓之（一七七九～一八七〇）

原名は廷颺、字は熙載。晩学居士、言庵などと号した。江蘇儀徴の人。書は各体に通じ、篆書は天発神識碑を、隸書は数多くの漢碑を範とし、草書は書譜を学んだ。

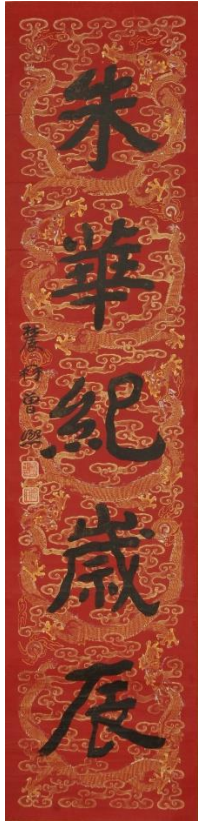
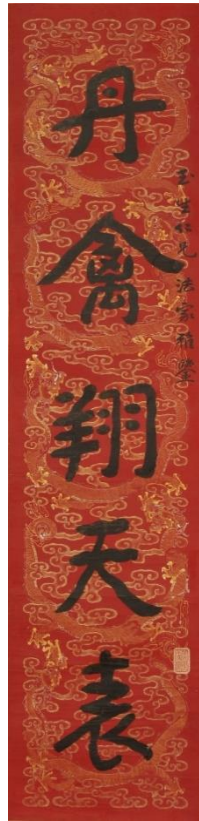
戴 熙（一八〇一～一八六〇）

字は醇士。号は楡庵、純溪、松屏など。別に井東居士、鹿牀居士とも称した。浙江省錢塘（今杭州）の人。絵画は山水を得意とし、筆墨秀麗にして深く王翬の神髄を得、松竹梅石は氣韻清逸と評された。

【解説】

浅葱色に染められた紙を用いた對聯である。「虎の尾を踏み春の水を歩くような態度が理想的である。馬が秋の水を渡るように心を静めることが良い方法である」という意味の語句が書かれる。細身で伸びやかな墨線からは洒脱な趣が感じられる。

絵画には、高くそびえる山が描かれる。画面には建物や閑所らしき門があるが、人物は描かれない。中国絵画の世界では、自ら画に入り山水に遊ぶことを「臥遊」と言う。心静かに絵に向き合い、臥遊を楽しんでいたきたい。



【釈文】

書：丹禽翔天表 朱華紀歲辰 玉生仁兄法家雅鑑 農髯曾熙
画：延年益寿 丁宝書仿新羅作於滬上時在戊辰三月春日方長百日
齋放也花

【作家情報】

曾熙（一八六一～一九三〇）

号は農髯。湖南衝南の人。李瑞清（一八六七～一九二〇）と名を斉しくし「曾季」と称された。張大千（一八九九～一九八三）の師。

丁宝書（一八六六～一九三六）

字は芸軒、また雲軒。号は雲翁、嬾雲。江蘇省無錫の人。晩年は華岳（一六八二～一七五六？）の画法を取入れたという。

【解説】

真つ赤な蠟箋が印象的な対聯に、「鳳凰は大空を翔ぶ。朱い華は正しく時を知らせる」という意味の語が書かれている。金銀泥で描かれた雲龍紋が見事である。震えるような墨線を用いる書法は「鋸体」と呼ばれ、中華民国初期に上海を中心に流行したとされる。

絵画には、大きな木にとまる二羽の鳥が描かれている。長い尾を持つ鳥は「綬帶鳥」と呼ばれ、「綬」の音が「寿」に通じることから、吉祥のモチーフとされてきた。長寿を願う想いが込められた作品である。

16 金城「篆書七言對聯」 中華民國元年（一九一二年）



【釈文】

金絲跣靄紅襪 采翰搖風絳錦鮮 壬子十月 北樓金城

【作家情報】

金城（一八七八〜一九二六）

字は鞏北または拱北、号は北樓または藕湖。英国で法律を学び、民国成立後は議員を務め、北京で暮らした。一九二〇年に陳衡恪（一八七六〜一九二三）らと国画学研究会を組織した。

【解説】

「金の糸は霞に縮んで赤色の薄い大きな布になる。手紙を手にとると風が吹き赤い錦が鮮やかである」という意味の語句を書いた対聯。水平線と垂直線を組み合わせた部分が多いため、紙面全体には謹厳さが漂っている。本作は表装・本紙ともにイタミがあつたため二〇二〇年度に修復を行った。

17 朱益藩「楷書五言對聯」 清時代末期〜中華民国初期頃



【釈文】

瑤池啓春宴 斑綵助親觀 朱益藩

【作家情報】

朱益藩（一八六一〜一九三七）

字を艾卿といい、定園と号した。江西省蓮花の人。光緒一六年（一八九〇）の進士。その書は、早年は碑帖を兼習し、晩年は王羲之（三〇三〜三六一）等の伝統的書法を善くした。

【解説】

「西王母の住む池で春に宴をひらく。まだら模様のお宝は親を喜ばせる」という意味の語句が書かれている。語句の内容から、めでたい席に飾られるために制作されたと思われる。太い線で堂々とした書きぶりの作品である。表装・本紙ともにイタミが激しかったため、二〇一九年度に修復を行った。

展示作品リスト

	目録番号	作品名		作家名	制作年	作品寸法 (mm)			
1	4A-0310	行書八言対聯	(書)	包世臣	清時代中～後期	不詳	1654	×	340
2	4A-1909	行書九言対聯	(書)	呉栄光	清時代後期	1841年	1810	×	322
	4a-0200	高士図	(絵)	王 鏞	清末～民国	不詳	1428	×	389
3	4A-0348	篆書集焦氏易林句八言対聯	(書)	趙時桐	中華民国	1943年	1660	×	250
	4a-1529	倣蘇漢臣歳朝図	(絵)	陳崇光	清時代後期	1878年	845	×	358
4	4A-0699	行書七言対聯	(書)	何維樸	中華民国	1912年	1295	×	320
	4b-0122	歳寒三友図	(絵)	趙 起	中華民国	1943年	1500	×	800
5	4A-2775	行書八言対聯	(書)	陸潤庠	清末～民国	不詳	1660	×	374
	4a-0531	蘭竹図	(絵)	胡 遠	清時代後期	不詳	1510	×	443
6	4A-0725	行書七言対聯	(書)	狄平子	中華民国	不詳	1710	×	385
	5a-0379	松寿図	(絵)	屈兆麟	清末～民国	不詳	1373	×	535
7	4A-3814	楷書八言対聯	(書)	翁同龢	清時代後期	不詳	1715	×	400
	4b-0164	青山翠色図	(絵)	呉 滔	清時代後期	1893年	1837	×	966
8	4A-0153	篆書八言対聯	(書)	呉大澂	清時代後期	不詳	1685	×	380
	4b-0008	百禄延年図	(絵)	王 震	中華民国	1916年	1475	×	802
9	4A-4000	行書七言対聯	(書)	梁同書	清時代中期	1814年	1233	×	279
	4a-2941	鶴松図	(絵)	王 礼	清時代後期	1873年	1761	×	461
10	4A-2875	篆書吉祥句七言対聯	(書)	呉昌碩	中華民国	1918年	1290	×	330
	5a-1289	山水人物図	(絵)	俞 原	中華民国	1924年	283	×	546
11	5A-0599	楷書七言対聯	(書)	陳宝琛	中華民国	1925年	953	×	228
	z4a-0020	山居幽賞図	(絵)	鄧春澍	中華民国	1942年	1343	×	670
12	4A-0729	篆書集陸来陸游詩句対聯	(書)	王昶	中華民国	1943年	1690	×	285
	4a-2597	梅花図	(絵)	胡 遠	清時代後期	1875年	1290	×	651
13	4A-0769	楷書八言対聯	(書)	華世奎	中華民国	1932年	1442	×	315
	4a-2331	榴開見子図	(絵)	蓮 湊	清時代後期	1884年	1175	×	537
14	4A-5026	篆書七言対聯	(書)	呉讓之	清時代後期	不詳	1345	×	311
	4a-3269	山水図	(絵)	戴 熙	清時代後期	1854年	1245	×	635
15	4A-1122	楷書五言対聯	(書)	曾 熙	清時代後期	不詳	1545	×	370
	4b-0538	延年益寿図	(絵)	丁宝書	中華民国	1928年	1500	×	800
16	4A-2873	篆書七言対聯	(書)	金城	中華民国	1912年	1343		273
17	4A-2601	楷書五言対聯	(書)	朱益藩	清末～民国	不詳	1526	×	318

令和3年(2021)4月10日発行

編集

公益財団法人日本習字教育財団 観峰館

所在地

〒529-1421 滋賀県東近江市五個荘竜田町136

TEL 0748-48-4141 FAX 0748-48-5475

<http://kampokan.com/>